冨岡美子･小川政弘作　「時よ、過ぎないで」

(効果音)	(教室のガヤ)
男子	(教室に駆け込み) ビッグニュース、ビッグニュース！　今度のクラス替え、成績順なんだってよ！
生徒 (口々に)	「なんだって?!」「そんなのないよ」
(効果音)	(教室のドアの開く音。なおもガヤが続き、教師が机をたたく。)
先生	いい加減にしろ！　いつまで騒いでるんだ。4 月から、お前たちが最上級生になるんだぞ。下級生の模範となって、指導していかなければならない立場に置かれるんだ。3 年生としての自覚を持つように。それからだ、いつも言っていることだが、来年に備えて、そろそろ勉強始めないと、お前たちの行くところないぞ。
生徒 (口々に)	「またかよぉ」「うるせーな」「そんなこと分かってるわよ」
先生	先生はお前たちのために言ってるんだぞ。これからは、しっかりと勉強するように。分かったな？　それじゃ今日はこれで終わりにする。
男子	「勉強、勉強」ってうるせえんだよ。中学生活あと 1 年、楽しく過ごさなくちゃ。なあ、礼子。
早川礼子	ほんと ほんと。受験に振り回されるなんて、真っ平ごめん。なんで成績順のクラス替えなんかするの？　今のままでいいじゃない。受験で苦しむなんて、あたしは絶対イヤだ。ああ神様、できるものなら、このまま時間を止めてください。
男子	「時間よ、止まれ」？　バカだなぁ。そんなことできるわけないだろう？　何が神様だ。そう言えば礼子、お前教会へ行ってるんだっけな。
礼子	うん。ただなんとなくね。中 1 の時、今井先輩に、弥生と一緒に誘われたんだ。
男子	へぇー。今井先輩って、あの頭がよくって、テニス部のキャプテンしてたんだろう？
礼子	そう。あたし、今井先輩のこと、とっても尊敬してるんだ。その先輩が行ってる教会へ行ってんの。時々だけどね。案外、教会って、楽しいところだよ。話はあんまし分かんないけどさ。
男子	とにかくだ。先公のやつら、受験のためにクラス替えして、今の楽しい生活を壊そうってんだ。勝手なんだよなぁ。
礼子	ほんとだよ。あたしたちの言い分も聞かないでさ。
ナレーション	ここは青春中学。毎年、クラス替えを行うものの、受験のために成績順にクラスを編成するということは、初めての試みだったのです。このことに不満を覚える生徒は数多くいました。早川礼子もそのうちの一人でした。

（効果音）　（玄関の戸の開閉音）
礼子　（元気欲）ただいま。ねぇお母さん、ちょっと聞いてよ。
母　一体何事なの、帰って早々？　もう少し女の子らしくできないの？
礼子　お説教はあと　あと。ひどいんだから。
母　だから、なんですよ。そんなにプリプリ怒ってて。
礼子　3年のクラス替え、成績順にするんだって。
母　あらまあ。よかったわねぇ。あなたみたいに勉強しない子には、ありがたいお話じゃない。
礼子　ヤだー。お母さんまで？
母　礼子、もう少しまじめに勉強してちょうだい。クラブもやめて、その代わり塾へでも行ったら？　そうでもしなければ、礼子、高校へ行けませんよ。お友達の高橋弥生さんだって、クラブやめて、塾へ行くでしょ？
礼子　ウソだー。弥生はあたしと一緒に最後までクラブ続けるって約束したし、それに「受験に振り回されるのはイヤだ」って言ってたもん。
母　あら、弥生さんのお母さんが、この前そう言ってたのよ。
礼子　そんなことない。弥生に限って…。あたし、弥生に直接聞いてくる。
ナレーション　礼子は、弥生の家に急ぎました。
（効果音）　（玄関のチャイム音）
礼子　早川ですけど、弥生さん、いますか？
高橋弥生　なんだ礼子。どうしたのよ、今ごろ。
礼子　弥生、どこか出かけるの？
弥生　うん、ちょっとね。あ、いけない。もうこんな時間。あたし急がなくちゃ。ごめん、礼子。話だったら明日にして。
礼子　弥生、もしかして、出かけるって塾？
弥生　……。
礼子　そうなのね。そうしたら、クラブをやめるって言うのも本当？
弥生　どうして知ってんの？
礼子　やっぱり本当なんだ。弥生、あんた、あたしと約束したよね？　最後までクラブ続けるって。あれはウソだったの？
弥生　あたしだって続けたいよ、できることなら。でも来年は高校受験。少しは勉強しないと。
礼子　だって弥生、「受験に振り回されるのはイヤだ」って言ってたじゃん。「今までどおり、楽しく過ごしたい」って。
弥生　そんなこと、いつまでも言っていられないの。あたしさ、今井先輩が行ってる高校へ行きたいんだ。だから、今から猛勉強しないとね。
礼子　今井先輩の行ってる高校？　先輩は最後までクラブ続けて、あたしたちの指

導してくれたじゃない。

弥生　バッカねぇ！　先輩とあたしは頭の構造が違うの。あたしみたいのは、塾へでも行かないと。礼子、あんたもあたしと一緒に塾へ行かない？

礼子　冗談じゃないよ。あたしはそんなところ、絶対行かない。何よ、弥生のウソつき！

礼子（モノローグ）　（エコー）受験、受験、受験！　皆、受験のために変わっていってしまう。だれも彼も自分のことしか考えていない。高校へ行くために、自分のしたいことをやめて塾へ行く。一体何の意味があるの？　中学生活は一度しかないのに。二度と来ないのに。受験があたしたちの楽しい生活を壊していくんだ。ずっと2年生のままでいたい。どうして高校へ行くのに、あたしたちの生活を犠牲にしなくちゃいけないの？　なぜ？　なぜなの？（多重エコー）

ナレーション　礼子は、受験にのみ目を奪われていく友に、いらだたしさを感じるのでした。それと同時に、自分一人だけ取り残されていくような、寂しさをも覚えるのでした。複雑な面持ちで歩いてきた礼子は、いつしか、時々行っている教会の前に来ていました。

今井先輩　あれ、早川さんじゃない！

礼子　あ、今井先輩。日曜日以外にも教会へ来てるんですか？

いまい　そうよ。今日は教会の掃除をしてたの。あと玄関をふいて終わり。ちょうどよかったわ。あたし、このところあなたたちにごぶさたしてるから、クラブ活動のことなんか、話聞かせて。

礼子　先輩…。

いまい　どうしたのよ？　早川さんらしくない顔してるじゃない。何か悩み事？

ナレーション　礼子は、先輩だったら自分のことを分かってくれると思い、事の次第をすべて話しました。

今井　ふーん、そうか。早川さんの気持ち、分からないでもないけど、早川さんは受験ということから逃れようとしているみたい。

礼子　“逃れる”？

今井　そう。確かに受験勉強はつらいし、苦しいものだわ。あたしも 3 年になりたくなかった。二年生のほうが、自分の好きなこともたくさんできて、楽しかったからね。どうして苦しい思いまでして高校へ行かなくちゃいけないのかって思ったりして。

礼子　へぇー、先輩が？

今井　そうよ。だって、2年の時のわたしのクラス、本当に楽しかったの。春や秋にはみんなでピクニック行ったり、文化祭ではみんなで取り組んで徹夜で準備して劇をやったり、壁新聞を班ごとに作ってコンテストやったり、「このままいつまでも一緒に要られたらなぁ。ああ時よ、過ぎないで！」なんて祈りたい気持ちだっ

たわ。

礼子　えー、先輩も？

今井　ン？　ははン、早川さんもそう思ったのね。2 年の最後のクラス会の時はね、みんな手を取り合って泣いちゃったわよ。

礼子　ふーん。そうかぁ。

ナレーション　礼子は、いつもイエス様のためにひたむきに生きている、まぶしいくらいの存在だった今井先輩が、なんだかとても身近に感じられたのでした。

今井　でね、3 年になってクラスも別になり、あんなに仲良しだったみんなが、クラブも次々にやめて受験に取り組んでいくのを見て、無性に寂しかったのね。大げさだけど、その時は、ほんとに生きているのがイヤになっちゃったわ。だから、早川さんの今の気持ち、すっごくよく分かるわよ。そんなわたしを見てた兄が、教会に連れてってくれたの。それがこの教会。そん時、川島先生、牧師先生ね、早川さんも知ってる、先生がね、こう言ってくれたの。「学生時代って本当に楽しいものなんだ。だから変わりたくない、いつまでもそのままでいたいと思うのは自然だ。でも人間は、絶えず成長していく。時を止めることはできない。過ぎゆくものにしがみ付いていることが、来るべき現実から目を背けることになったら、それは“逃避”なんだよ」って。

礼子　“逃避”、か…。

川島牧師　（エコー）大切なのは、その時、その時を、二度と繰り返せないものをいとおしむように、しっかりと生きることなんだ。

今井　その時、わたし、「あ、ここにわたしが求めてるものがある」って直感的に感じたの。おかしいわね。先生はイエス様の“イ”の字も言わなかったのに。でも、間もなくわたしはイエス様を信じて、その時先生のおっしゃった意味が、自分なりにつかめたのね。「わたしは、いつまでも、どこでも、イエス様のために精一杯に生きていけばいいんだ」って。

ナレーション　礼子は、信仰のことはまだよく分からなくても、「先輩は、今言ったとおりの生き方をしている。先輩のまぶしさの秘密はこれなんだ」と思いました。そして、「このまぶしさを、わたしも自分のものにしたい」と、その時、心の底から思ったのでした――。

＜完＞